
真・恋姫†無双～太史立志伝～

ちや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜太史立志伝〜

【Nコード】

N5074Q

【作者名】

ちや

【あらすじ】

あれ、確か部屋で寝てたはずなのになんで起きたら知らない天井で、

赤ん坊で、知らない女の人（しかもすっぱー美人）に抱かれてんの！？

一体全体何がどうなってるの！？

教えてエロい人！！

そんな感じで始まったオタクの少年椎名真琴による原作改変の物語。

彼の歩む先に待っているものとは！？
多分なにもない！！！！

この物語は作者の妄想と独自解釈、超展開などで構成されています。

また、オリキャラが多数登場し、収集がつかなくなる恐れがあります。

だからなに？って方のみが見ることをお勧めいたします。

0 話（前書き）

はじめまして、ちやともうします。

色々な作品に感化されて、書き始めてしまいました。

長々とまえがきを書いてもアレなのでまずはプロローグをどうぞ！

0 話

「はあ、やっぱりさくらちゃんはかわいいなあ」

俺の名前は椎名真琴（しいなまこと）、所謂どこにでもいるようなオタクだ。

現在高校2年生で、誕生日が某魔法先生野菜少年のせつちゃんと同じなのが自慢だ。

ちなみに外見は某さくらちゃんに出てくる中国人陰陽師的なやつを実写にした感じらしい。

趣味は漫画やアニメを無作為に見ることで、オタクな友人にはよく流行がずれてるといわれている。

具体的に言えば、某女子高生が軽音楽部に入ってうんぬんかんぬんの話は流行が来る前に読破していたり、某管理局の白い悪魔の話は今更マイブームになったりしている。

特技はどんな場所でも3秒で寝られることと、寝起きがいいことだ。（自分で起きたときに限るが）

今は、自室でオタクになった原点のN。Kの大きなお友達を大量生産した某さくらちゃんを読み直してるところだ。

「ん、もう2時か・・・明日も学校だしな、寝るとしますかね」

そのままベッドにダイブして眠りにつく。

（???side）

暗闇に支配されている空間で一人の女性が書類を片手に何かをつぶ

やいていた。

「えっと、次の外史はどれだったかなって」

「これじゃないのかしらん」

「あ、そうそうこれだ……っていたの——？」

「ええ、ようやくあの外史にも一区切りついたからねん。
ご主人様に会えなかったのは寂しかったけどねん」

そう言いながら体をくねらせるほぼ全裸の筋肉ダルマ、
しかし女性は気にする様子もなく作業に入る。

「さてと、次の外史はどんな外史かなって……
うわ、大丈夫なのこれ？」

「どれどれ、これは少々管理者としてはきつい外史じやのう」
いつの間にか現れた立派な髭を蓄えたふんどしのガチムチが声をかける。

「あ、—— も戻ってきてたんだ。
じゃなくてこれは、まずこの子を少し改造して外史に送って、
北郷君はいつも通りであそこに落として、二人は今回行くの？」

話しながら、パソコンのような端末をいじり出す女性。

「あたしは行くわよん」

「もちろんじゃ」

「じゃあ、二人はいつも通りあの子と一緒に行動するということだ、
つと、」

この子の名前かぁ・・・じゃあ真名はそのままで・・・」

「こういう管理では旦那ちゃんの右に出る子はいないわねん、卑弥
呼」

「そっじゃのう、貂蟬」

「そっだ、あのバカ二人の更生にも使っちゃおうかしら、
んとゝ能力はアレとコレと・・・」

「・・・やりすぎないうちに止めないとねん」

）side out）

朝、鳥の鳴き声がする。

気持ちのいい朝だな、さて起きるか・・・おや？

体が持ち上がらないっていうか、誰かに抱えられてない？

「おぎやあああああああ！！！！（なんじゃこりやあああああ！
！！！！！！）」

あれ、確か部屋で寝てたはずなのになんで起きたら知らない天井で、
赤ん坊で、知らない女の人（しかもすっぱー美人）に抱かれてんの
！？

一体全体何がどうなってるの！？
教えてエロい人！！

0 話（後書き）

というわけで、はじまりました大史立志伝。

名前で主人公が誰になるかはわかりますよね？

能力などは随時物語の中で解明されていきます。

誤字脱字等ございましたら、ご一報くださいませ。

1話

あの劇的な目覚めから10年たった。

時間飛びすぎとかいわれても知らんとしか言えないからな！

その辺は俺じゃなく作者に言ってくれ！

・・・なんか電波を拾った気がする。

あの目覚めの後に、名付けというイベントが起きた。

もらった名前はまさかの、太史慈という名前だった。

しかも、真琴という真名までいただいってしまった。

その時からなんとなくは予想していたんだが、もしかしたら正史にも真名というものがあつたかも知れないので、確信は持てなかった。

でも、俺が2歳の時に決定的な出会いがあつた。

家の斜め前の呂さんのところに待望の赤ちゃんが産まれた。

名前は呂蒙、真名は亞莎、これで確信した、ここが恋姫の世界だと・
・

しかも、亞莎がいるってことは真の方だな。

その後には、俺に妹が出来た。

名前は太史享、真名は萌葱（もえぎ）、なんで娘じゃなかったのか
が激しく疑問だが、

些細な事だと割り切り可愛がった。

おかげなのかは知らないが、俺にべつたりになっちゃった。

外で遊びはじめると、少し離れた区画に住んでいる女の子の
楓とも仲良くなった。

はじめに真名だけを教えてくれたので名前の方を知らない状態で遊

んでいたんだが、ある時家にお邪魔したら楓のお母さんが自己紹介をしてくれたのをきっかけに、楓の名前を知った。名前は朱治、なんで俺と同年代なのが気になったが恋姫ならよくあることとしておいた。

そして、5歳の頃から知を、7歳になってからは武も鍛えはじめた。知の師匠は父さん、武の師匠は母さんだ。鍛えはじめてわかったけど、前の世界のときのスペックをはるかに上回っていた。

2次創作によくあるプロセスを踏んできているわけじゃないのにな、知の方は多少上乘せされたぐらいだけど、武の方は明らかにおかしかった。

どんな武器を持ってもその使い方が頭の中に浮かんでくるし、型にしても初めてで完璧とはいかないまでも、かなり綺麗にできた。鍛えはじめて1年で母さん、亞莎の母親以外には負けなくなっていた。

とりあえずは、恋姫の世界ということと、太史慈という補正があるということにして自分を納得させた。

あとは、容姿は某小さい狼君から変わってなかった。

ただ、声は元々は保。総。郎似だったのが完全に某さくらちゃんの小さい狼君になっていた。

……あの服作ろうかね？

それから、こういう理由かは知らないがやたらと動物に好かれる。前に村の近くの森に行ったときに狼に周りを囲まれたことがあった。その狼が少しずつ近づいてきてさすがにもうだめだと思って目を瞑ってしまったんだけど、

何故か手を舐めてきた。

顔を上げると飛びかかってきて顔も舐められた。

あとは、散歩に出るとよく小鳥が肩に止まる。

ホントなんでなんだろうか？

んで、今は何をしているかというところ……逃げている最中だ！

「こら、真琴逃げんじゃない！

おとなしく捕まりなさいよ！」

「誰が捕まるか！

いい加減俺を実験台にするのやめてくれ、楓！」

そう、楓はことあるごとに俺を整体（本格的なものではなくマッサ―ジレベル）の実験台にして、成功ならみんなにやり、

失敗ならまた別のやり方を俺に実験するということを続けている。

成功のときは確かに気持ちいいんだが、失敗した場合下手すると1日動けなくなることになる。

しかも、割合が8：2で失敗の方が多いという状態だ。

そんなものに誰が好き好んで実験台になるか！

1話（後書き）

連投とまではいきませんでした。が、とりあえずは書き上がりました！

この後は少し間が開いてしまうと思います。

なるべく書き溜めて木曜に一気に放出したいと思います。

誤字脱字等ありましたら、ご一報ください。

2話

アレからさらに5年の月日が流れた。

その間の大きな出来事かというと、まずは袁逢（えんほう）様と袁術、美羽に会う機会があった。

俺の村は袁逢様の領土のなかにあつて、袁逢様が視察に訪れたときに知り合った。

袁逢様は原作の袁家「バカ」というイメージを吹き飛ばしてくれるよ
うな人だった。

頭の回転はいいし、何よりも民のことを優先的に考えてくれている。

美羽は案内をしているうちに仲良くなり、真名を預けてくれた。

素直でいい子だし、拙いながらも袁逢様から一つでも多くのことを
学ぼうとしていた。

この子がどう間違えば原作のわがまま姫になるのかが、不思議でな
らない。

修行の方は、知はそれなりにしか伸びず、後からはじめた萌葱に抜
かれて、どんどん離されていつている。

武に関しては4年前に母さんから初めて一本とれた。

まあ、もちろん手加減された状態でだが、それでも嬉しかった。

ただ、次の日から段階を3つくらいすっ飛ばして一気に厳しくなっ
たが……

あとは、気の鍛錬を始めた。

亞莎のお母さんの話だと、10年に1人の逸材らしい。

気は体が出来てからじゃないと危険らしいので、今まで教えてくれ
なかったそうだ。

あと、亞莎も一緒に鍛錬をするようになった。

歴史を知っている身としては、こんな可愛い娘を阿蒙なんて呼ばせないとはかりに文武両道で教えている。

武も知もマジメに何このチートとか思ったりしたけど、問題なく教えられている。

知はもう既に追い抜かれているけどね・・・

そして、2年前にとうとう人を殺してしまった。

近くの森に山菜を取りに行った帰りに、うちの村を襲おうとしている賊とはち合わせた。

一緒にいた萌葱に先に帰らせて母さんたちに知らせさせて、俺は賊の足止めをしていたが、

殺気になれていなかったり、実戦が初めてと言うこともあり体が思うように動かず、

殺されると思った瞬間に、体が勝手に動いていて気づいたときには母さんたちがきていて俺の周りには賊だったものが無数に転がっていた。

体が勝手に動いていたとは言え、人を斬った感触は残っていて、一月ほどは悪夢に魘されていた。

その間励まし続けてくれた萌葱、亞莎、楓の3人には感謝してもらえない。

そして、その頃から賊が増えはじめていた。

（黄巾の乱の前兆が始まっているのかもしれないな、

そろそろ旅にでる許可を母さんにもらっておこう。）

そんなことを考えていると母さんから呼ばれる。

「母さん呼んだ？」

「あんた、これからどうすんだい？」

いきなり聞かれたため、読心術でも使えるんじゃないかと思ったりしたけど、正直に伝えることにした。

「色々な臭くなってきたし、旅に出て見聞を広めたいって思ってるよ。」

「そうかい、なら行っておいで、その間の村のことは気にしないでいいから。」

「ありがとう、母さん。」

しかし、萌葱たちになんて言おうかな？

「その辺はあんたの仕事だからね、くれぐれも黙っていくんじゃないよ？」

「わかってるよ、母さん」

それから数日は萌葱たちの説得に奔走した。

楓はあっさりと納得してくれたけど、やっぱりというか、萌葱と亞莎には泣かれてしまった。

何度かの説得で渋々ながらも納得してくれた。

そして、出発の日

「じゃあ、行ってくるね。」

「いってらっしゃい、お兄ちゃん。」

「いつてらっしゃい、真琴さん」

「頑張つてきなよ、真琴。」

泣き言言つて帰つてきたら1日実験台だからね!」

「わかつてるよ、楓」

「真琴、選別だよ、持っていきな。」

そう言つて母さんが渡してきたのは、母さんが使っていた双剣「覇神」の片割れの神龍だった。

「いいの?」

「どうせここにあつたつてそんなに使わないんだ。

だったら絶対に使う人間が持つてるほうがいいに決まつてる。

それに、もうその剣じゃあんたの力に耐えられないよ。」

「わかった、ありがとう母さん。
じゃあ皆、行ってくるね!」

2話（後書き）

なんというか、とにかくにも文才が欲しいです・・・
その辺に落ちてないもんですかねwwww

この話で一応のプロローグは終了です。

これから旅のなかで様々な人たちに出会い、成長していく真琴君を見守ってあげてください。

ぶっちゃけると、大筋は変わってないんですが、最初の設定と細かい部分が変わってたりします。

簡単にいうともう美羽と知り合ってたたり、太史享が弟から妹になったり、

更に言えば、主人公の名前や外史への入り方なんかも変わってます。

完結したらその辺の変わり様を上げるのもいいかもと思ってたり
しますw

誤字脱字等ありましたら、ご一報ください。

大史立志伝設定集（前書き）

旅立つ時点での設定です

三国志11のような数値表記となります

簡単に言えば、全ての数値は100が最高です
（数人例外がありますが）

大史立志伝設定集

光栄版三国志11風 オリキャラ設定集

太史慈 子義 (真琴) 15歳

統61 武91 知68 政36 魅80

身長 162cm

体重 52kg

元の名前は椎名 真琴

寝ているところを姐己により転生させられてしまう

そのさいに強化されたので元の世界よりも色々な面で優れている
見た目はCCさ。らの小狼の身長を伸ばしただけ

声も姐己により変更されたのでどう見ても、そうとしか見えない

元々オタクで恋姫は真までやっている

好きなキャラは美羽と七乃で2人の掛け合いが大好きである

性格は社交的である程度の礼儀は弁えている

母から母が使っていた双剣「霸神」の片方「神龍」を旅の饞別にも
らった

現在扱える武器

- ・ 剣 (母から一本とれるレベル)
- ・ 槍 (少しかじった程度)
- ・ 弓 (祭や紫苑の部隊の部隊長程度)

与えられた能力

- ・ ありとあらゆる武器、武術の才能 (あくまでも才能であり、鍛錬

しなければせいぜい一般人よりも扱いがうまい程度)

・ 気を使いこなせる才能(→と一緒の注意事項)

・ 動物に好かれる体質

・ 声の変更

・ ??????

・ ??????

太史享 元復(萌葱) 13歳

統37 武45 知78 政56 魅70

身長 132cm

体重 ??kg

真琴の妹

人見知りで少々ブラコン気味

知の方では、兄よりも優れた才を発揮している

武は才はあるのだが、それを発揮しようとしな

髪は茶色で肩甲骨の辺りまで伸ばしている

体はまだまだ成長途中で胸もぺったんである

扱える武器

・ 剣(原作の桃香レベル)

・ 弓(狙ったところから半径1mに刺さる程度)

朱治 君理(楓) 16歳

統65 武68 知80 政60 魅68

身長 158cm

体重 ?? kg

真琴の幼馴染

性格はかなり豪胆でいつも真琴が手を焼いている

マツサージに凝っており新しいことはいつも真琴に試している

武も知も卒なくこなすことが出来るが面倒くさがりでもある

髪は黒で腰まで伸ばしている

普段の服装が浴衣を動きやすく改良したようなもので、日本人に見える

この時点で既に胸が蓮華なみにあり、将来有望である

扱える武器

・弓（30cmの的なら外さないレベル）

大史立志伝設定集（後書き）

例外についてですが、←の通りになります。

恋と漢女二人の武力

華琳と雪蓮の統率

桃香と張三姉妹と一刀の魅力

知力や政治は超えさせるとバランスが取れなくなるので超えさせて
いません

年齢については原作開始時に15歳を超えるように設定してあります
（璃々以外）

あとは、武力に関しては恋が一番上になっています（本来漢女二人
の方が上です）

次回投稿は今週か来週の木曜日になります

3 話（前書き）

約束までに出来上がったのでうpです。

3話

村を出てから3週間ほど経った。

今は寿春にいる。

こんなに遅くなる予定じゃなかったんだけど、通り道に賊の拠点があつたのでそれを潰していたらこんなにかかってしまった。

今では、賊たちから黒龍と呼ばれ恐れられているらしい。

由来は、俺が黒を好んで着ていることと、潰された拠点は龍に襲われたかの様に何もなくなることかららしいが、そんなことはした覚えがないんだがなあ・・・

まあ、噂は誇張されるものだし気にしてたら身が持たないか・・・

ちよつとだけ妲己side

「都合良く賊を潰してってるわね、情報操作で少し誇張しておきましようか」

そういつて楽しそうにキーボードを叩く妲己であつた・・・

side out

・・・なんか変な声が聞こえた気がするな？

まずは、袁逢様に挨拶してから他の有力諸侯のところに行ってみようと思つている。

門番のところまで行き、会いたい旨を伝えると、あっさりと通してくれた。

玉座の間に通されると、そこでは今まで会議をしていたと思わせる

ほど人がいた。

「袁逢様、会いたいと言っていたものを連れて参りました。」

「ご苦労様、下がっていいわよ。」

「はっ！」

そういつて案内をしてくれた兵士が下がっていく。

会議の方も一段落ついていたようで、文官や武官の人が玉座の間から出て行く。

部屋に残っているのは、ピンク色の髪を肩まで伸ばした赤い露出度の高い服を着たことなく孫姉妹に似た女性と、

紫の浴衣のような服を着た張勳らしき人と、

今にも飛びついてきそうな美羽とそれを微笑ましく見守っている袁逢様だけになった。

「さて、久しぶりね太史慈、噂は寿春まで届いてるわよ。

それで、今日はどうしたのかしら？」

「お久しぶりにございます、実は旅に出ることの報告と、

懸賞金のかかっていた賊を数人倒したのでその精算をしてもらいにきました。」

そういつて持っていた麻袋を前に出す。

中には3つの首が入っているのだが、さすがにその場で出すことはなかった。

「わかったわ、懸賞金については城を出る前に渡せるようにしておきます。」

それで旅に出るということだけど、何か必要なものはある?」

「ありがとうございます、必要なものは特にはないです。
というか、あっても袁逢様からもらうわけにはいきませんよ。」

「そんなこと気にしなくていいのに、
それにこの近辺の賊を倒してくれたおかげで出兵にかかるお金や
兵糧が節約できたのだから当たり前 報酬としてもらってもいい
くらいよ?」

「しかし、お金さえあれば旅はできますし、武器も母から譲り受け
た神龍があります。」

「それじゃあ、私の気が済まないのよ!
そうだ、あなた弓も使えたわよね、うちにある弓と、それと馬も
あげる!」

いきなりキャラが変わった!?
というか、袁逢様ってこんなキャラだったの!?
そんなことを考えていると袁逢様の隣にいた七乃らしき人が注意し
ていた。

「美奈様、本性出てきてますよ、いいんですか?」

「太史慈相手ならいいわよ、猫かぶってるのも疲れるしね。」

どうやら、今まで猫をかぶっていたらしい……

結局美奈様の言った通りのものを貰うことになった。

その時に真名も預けてもらった。

その時に言ったことは「これから美奈と呼びなさい、反論は認めないしそれ以外で呼ばれても返事しないから！」という状態で、本当に返事してくれなかったので、真名で呼ぶしかなかった。

嫌というわけではないのだけど一国の主がこんな簡単に真名を許しているのだろうかと思ってしまう。

ちなみに部屋にいた赤い服を来た人が孫堅さん、

浴衣のような服を来ていた人はやっぱり張勳さんだった。

孫堅さんとは同盟をしたらしく、その話し合いにきていたらしい。張勳さんはやたらとキャラが違っていたけど、こちら猫をかぶっていることが発覚した……

この軍大丈夫か？と思ってしまう俺は悪くないと思う。

それで、弓と馬はすぐに用意できるらしいのだけど、

金の方がすぐには無理ということでは何故か2、3日城でお世話になることに。

もちろん断ったのだが美羽が涙目＋上目遣いという最強兵器を使っ
て来たためお世話になることになった。

弓はすぐに受け取り、馬は金と一緒に貰うことになった。

弓は聖龍弓（せいりゅうきゅう）といい、ものすごく使いやすかった。

3 話（後書き）

どうしてこうなった・・・

思いつくままに書いていたら何故かあんな風になってました。

お気に入り登録ありがとうございます！

いやゝまさかこんなにお気に入りにしてもらえるとは思いませんでした。

30 話超えたあたりでやつと10 人くらいだと思ってたんですけど
ね^^;

誤字脱字等ありましたらご一報下さい。

4 話（前書き）

1 週間ぶりです。

年末あたりから読んでた小説が終わってきていて少し寂しい感じがしています。

特にゼロ魔原作の「現代人のお気楽極楽転生ライフ」様はまだ10話くらいのおきにみつけて読んでいたんですが、とうとう終わっちゃいました。

8ヶ月で250話ということもそうですが、毎日休まず投稿し続けたというのはすごいと思ってます。

毎日のもう無理ですが毎週の投稿を目指して頑張っていこうと思いますので宜しくお願いします。

4話

あれから、滞在している間に使うことになる部屋に案内された。

案内は七乃さん（玉座の間を出てから預かった）で、俺の上には美羽が乗っている（肩車状態）

俺が肩車したわけではなく、七乃さんから真名を預かっていたときにより登ってきた。

七乃さんは注意はするが微笑ましく見ていたといった状態だった。

12歳とは思えないほど小柄で本人はものすごく軽いのだが、いかんせん服がやたらと重いし長いから首がこるのと、スカートらしきものが邪魔でしようがない。

まあ、亞莎も小さい頃に暗器を忍ばせたまま肩車とかしてたから慣れてるっちゃ慣れてるが・・・

「こちらが真琴さんに使っていただくことになるお部屋になります。」

「

「ありがとうございます、少しの間ですが厄介になります。」

そういつて軽くお辞儀をする。

いきなり頭を下げたので美羽が落ちそうになるが俺の服の肩部分を掴んで前転のような形で降りてくる。

「真琴、いきなり頭を下げるでない、危なかったのじゃ！」

「ごめんごめん、あまりにも軽いから乗ってること忘れてたよ。」

実際は美羽は意外と運動神経がいいので落ちないだろうと読んだんだけど、それ言うと思ったより運動神経無かったんだって言うてる

ものなので、内に秘めておく。

「そ、そうなのかえ？」

仕方ないから許してやるのじゃ！」

許してもらえたところで、部屋に入ってみる。

わかってたことだけど、一部屋でうちの半分の大きさがあつた。城の一部屋と小さな村の一軒家を比べるなど言われそうだけど、やっぱり悲しくなるってもんなだつて……

若干沈んでいたら後ろから「真琴は大丈夫なのかえ？」とか「きつと精神的にも肉体的にもお疲れなんですよ。」とか聞こえてきた。美羽は心配してくれているとわかる声色だったのだが、七乃さんはどう考えても理由がわかつているような感じで言っていた。確かに精神的にも肉体的にも疲れてはいるけど、それに関しては半分位はアナタの主のせいですからね！

慣れない長旅と、その他もろもろで疲れていたのは確かだったので、先に休ませてもらうことにした。

美羽が残念そうにしていたけど、話したり遊んだりしているときに倒れたら元も子もないので引き下がってもらった。

ドアを閉めてからベッドに飛び込んでこれからのことを考えていた。

「これからどうしようかな？」

ここが恋姫の世界なら曹操と孫策には会っておきたいし、

真の方みたいだから益州にいるはずの3人にも会いたいし、

董卓やら馬超たちにも会いにいきいたいしな。

あとどれくらいで原作始まるのかわかれば種馬君にも会える確率上がるんだけどなあ、

まあ、無いものねだりはしてもしようがないか。

劉備たちは原作始まんないとどこにいるかもわかんないし、趙雲たち3人は運に任せるしかないしな・・・

こつやって考えると出ること少ないな、

まあ、ここで悩んでも仕方ないか、なるようになれだな！」

そう言って目を閉じて眠りにつく。

翌朝、夜のうちに潜り込んだ美羽に布団に世界地図を作られることも知らずに・・・

4話（後書き）

今回短めです。

いつもそんなに長くないですがw w w w w

木曜にしか休みがないので執筆が進みません^^；

携帯ですこしずつ書こうと思うんですが、a uのスマホじゃ書きにくいという罨

まあ、無理せず頑張ろうと思います。

ちなみにこの小説では数人がめちゃくちゃ好待遇になります。
美羽とか七乃とかねw

いつも通り誤字脱字のご報告や感想等お待ちしております。

5 話（前書き）

できたのでうpです。

5話

朝は大変だった。

俺の布団に美羽が潜り込んでいた・・・そこまではまだ良かったんだが、

潜り込む前に蜂蜜水を飲んできたらしい。

どう考えてもフラグだった。

そして、そのフラグは成立してしまっただろう・・・

俺は幸いにも早くに起きて鍛錬していたため被害は無かったが、部屋に戻る途中で美奈様に干されている（文字通り）美羽を発見した。

隣には世界地図の広がった布団が干してあって、何があったかはすぐに悟った。

その際、柱の影から七乃さんが危ない呼吸をしながら覗いていたが、華麗にスルーしておいた。

今はやることがないので、東屋で飲茶している。

朝の鍛錬の時に思ったけど、弓用の鍛錬ってしたことないんだよね・・・

まあ、その辺は適当にやっていくしかないのかな？

益州いったら黄忠さんにでも教わろうかね？

お金の用意は今日の昼過ぎには終わるらしい。

体内時計では今は、10時過ぎあたり。

何して過ごそうか考えていると、孫堅さんがこちらに歩いてきた。

「あれ、孫堅さんどうしたんですか？」

「ん、太史慈か、ちょうどいいわ、ちょっと着いてこい。」

「え、わかりまして服掴まないでくだってそのまま引つ張らないでくださいよ！」

ちゃんと着いていきますってば〜！」

結局そのまま引きずられて目的地である鍛錬場に連れてこられた。そこには、美奈様や美羽、七乃さんや昨日は見なかった人たちがいた。

「お、真琴をつれてきたのね。」

「こやつなら賊退治が出来るくらいだからそれなりに戦えるだろう？それにやるなら少しでも強いやつの方がいいしな。」

「えっと、俺は何故に連れてこられたのでしょうか？」

「真琴にはこれから、うちの武将の紀霊とそこにいる孫堅の2人と模擬戦をしてもらいます。」

「何故に俺なんでしょうか？」

「その方がおもしろい、げふんげふん、色々な人とやった方がいろんな経験できるでしょう？」

今一瞬本音が出てたな。

つか、これ拒否権なさそうだな……

「ちなみに拒否権は「あると思う?」「デスヨネ。」

思った通りなかったらしい……諦めて怪我しないように頑張りますかね。

「じゃあ、3人の総当たり戦ね、まずは真琴と杏樹ね。

んで、その後に真琴と蓮香（れんきょう）、最後が杏樹と蓮香ね。得物はあそこの刃の潰してあるのから好きなの使って頂戴。

あと、基本休憩は取らないから、怪我した場合は軽い手当の時間は取るけど。」

ちなみに、杏樹「紀霊さんで蓮香」孫堅さんである。

2人が自分の武器に似たものを選んでいく中俺は、鏃の潰れた矢と、双剣を手にした。

今現状で2人には勝てるとは思わないので、これも鍛錬だと思うことにした。

ちなみに、双剣も弓も母さんから使えるようにしてもらったし、賊退治の時に奴等の武器を拾ってそんな感じで使っていたので問題はないはず！？

ちなみに、紀霊さんが大槌、孫堅さんが両刃の剣だった。

「準備はいい？」

声をかけられたので頷く。

「では、太史慈、紀霊両者前へ、始め！」

「はあああああ！」

掛け声と共に紀霊さんが突っ込んできたので、牽制で矢を2本連続で射る。

当たり前の様に弾かれたので、双剣を抜いてこちらも突っ込む。

「なんだい、弓はもう終わりかい？」

その剣であたしの攻撃を耐えられるのかい？」

「耐えられそうもないんで避けさせてもらいますよっ！」

ギリギリではあるが何とか避けられたので、そのまま反撃に出る。

「ふっ！はっ！やっ！」

自身の出せる限界の速さで3連撃を繰り出すが全て避けられる。

攻撃され始めたら負けると思い、そのまま連撃を繰り出し続ける。なるべく隙のないように連撃を繰り出していたけど、

そこは実力と実戦経験の差で小さな隙から剣の片方を弾かれてしまう。

そこからは、何もできずに終わった。

「やめっ！勝者、紀霊！」

勝てると思っていたわけではないが、やっぱり負けると悔しいものがある。

「いろいろ粗いがまだまだ伸びそうだな。

もうちょっと、足を動かしてみな。

そうすりゃもうちょっといい試合が出るようになるよ。」

「はい、ありがとうございます。」

まだまだなんだと実感できたな。

次は孫堅さんか……紀霊さん以上に勝てる気のしない相手なんだよな……

弓は邪魔になり兼ねないからなあ、置いていこうつと。

孫堅さんの場合攻められたら最後の気がするから攻めまкруつ。

「次、太史慈、孫堅前へ、始め！」

「せやあああああ！！！」

細かく動きつつ連撃を放ち続ける、しかも一撃一撃にある程度は力を込めないといけないので疲れることこの上ない。

とりあえずは望み通りの展開になったけど、こつちの攻撃を難なく受けられているため全くもって優位に立った気がしない。

相手の剣が一瞬動いたため、直ぐ様後ろに跳ぶ。

その後すぐに剣が横薙ぎに振るわれた。

刃は潰してあるはずなのだけど、前髪が数本持っていかれた。

「質問なんですが、刃潰してありますよね？」

「何を言っておる、当たり前だろうが。」

まあ、私くらいになると関係なくなるけどな。」

なんか問題発言が聞こえた気がする。

「さて、おしゃべりはこのくらいにしてそろそろ攻めさせてもらおうかな？」

そう言われた瞬間、剣の腹で思い切り薙がれた。

油断していたわけでは無いのだが、全く見えなかった。
そのまま、吹っ飛ばされて壁に叩きつけられた。

「やめっ！勝者、孫堅！」

それがその日俺が聞いた最後の言葉だった。

5 話（後書き）

戦闘シーンがわかりづらい……
文才が欲しいです。

ちょっとした質問なんですが、1話1話が短いですかね？

他の作者様の作品と比べてかなり短いな～と思っていたんですが、ぶつちやけ長くすると週一ペースが崩れそうで、この長さなんですよね^^；

小説書くのに慣れてきたら少しずつ長くしていこうと思っているんですが参項までに聞いてみました。

ちなみに0話～3話までが1500文字前後、4話が800文字程度、5話が2000文字程度です。

今後文字数が増えても1話10000～15000文字程度で納めようと思っています。

最後に誤字脱字や表現の間違いなどありましたらご一報ください。

お知らせ（前書き）

長い間放置してすいませんでした

お知らせ

更新止めてて申し訳ないです。

知り合いから同じような内容のものがあるとの指摘があり、なんとかそれを修正しようとしていたのですが、そちらの作品とかなりの内容が被ってしまっていたため修正しきれませんでした。（前提条件から変えなくてはいけないため）

なので、こちらの作品は更新を凍結させていただきます。

いるのかはわかりませんが少しでも更新を待っていてくれた方には心からの謝罪をさせていただきます。

最後になりますが、本当に申し訳ありませんでした。

お知らせ（後書き）

また、何かしらの小説を書こうと思っているので、そのときはよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5074q/>

真・恋姫†無双～太史立志伝～

2011年10月7日15時16分発行